

「ハイラル」敗戦記

静岡県 清 初生

静岡県富士郡富丘村大中里一七八七番地において自作農兄弟十人の長男として生まれ、兄弟十人の内、男七人、女三人、現在男子三人、女子二人生存中なり。小生、昭和九（一九三四）年富丘尋常高等小学校卒業。家業の農業を手伝いながら夜間青年学校に通学。

昭和十六年、弟と二人で徴用工として名古屋の軍需工場に入社。弟は名古屋の海軍工廠、小生は名古屋南区大同製鋼星崎工場、殺人工場として名高い工場であった。工場はある民家を買上げ鳴尾寮という所に案内された。陸軍の除隊兵の下士官が寮長として軍隊生活と同じ様に起床から始まり、隊列を組み工場へ出勤し、真っ赤に焼けた鉄が熱く、我々百姓出身者には向かなかった。

腹は減りへとへとだった。入浴を済ませ、会社

とそこは朝鮮の釜山であった。早速汽車に乗り込んだ。

北へ北へと走る。到着したところは朝鮮第二六部隊野砲隊留守部隊である。ここで三カ月間過ぎ、また移動命令。汽車は一路北へ向って走った。静岡―九州―朝鮮。今度はどこへ行くのだろう。五個分隊に別れ、各々将校、下士官付き添いで北へ北へと。古年兵は一人もいなかった。寒いのが身にしみた。午前二時頃、突然汽車が停まり下車命令。今度はトラックに乗せられ北へ北へと進み、やがて部隊に到着すると三年満期だった。どっと兵舎から外に飛び出して来た。両方共敬礼、訓示が始まった。ここはソ満国境守備隊である。

今諸君と向かい合っている諸君は満期兵である。君達と交替してもらおう、よろしく頼むとのことだ。後で分かったが寒いはずだ、北辺の地ハイラルである。一期検閲も終り各守備の任務に付いた。六カ月勤務して原隊に帰る。守備隊は五地区に別れている。私は第一地区守備隊に配属された。

の寮食堂で食事を済ませ、寮に帰り自習及び着る物の繕いをする。寮母がいて指導を受けた。会社は重砲の砲身、また機関銃等と色々なものを製造していた。こんな会社で働くより軍隊に入った方が良いと決心し、志願し、甲種合格。在外部隊を志願した。そしてようやく家に帰ることが出来た。さて入隊の通知が来た、一月十日までに福岡に集合せよとのこと。盛大な送別会で西富士宮駅より友人の後藤政雄君と一緒に熊本に向った。汽車の中から絶対に頭を出すなど言われた。しかし名古屋駅で車窓から頭を出して日の丸の旗を振った。いきなり頭をたたかれ「シヨンポリ」して九州までじつとしていた。

福岡に到着、早速下車命令。兵隊受領の将校、下士官の迎えである。名前を呼ばれ各所に集合、旅館に入る。身体検査も終り、何やら分からない呼ばれたままに集合場所に行った。軍服を渡され、終わると乗船し、いよいよ南方かと思ったら船は揺れる。何と玄界灘である。船が停船、下船する

間もなく二地区より郷里安居山^{アゴヤマ}のS曹長が配属されてきた。三、四日ぐらいいは何もしないでいた。この期間が過ぎると初年兵いじめ。毎日、毎日ピントが飛ぶ、私的制裁である。私はS曹長のお陰で事務室勤務。「清」は俺の手伝いをやれと言われ、S曹長の下で働いた。

お蔭でピントをもらわなくてすんだ。そのうち部隊編成。この五地区は街を守るためという。しかし重砲及び火器爆薬はほとんど無かった様だ。また再度編成替えがあり東山高射砲隊に行くことになり、東山に集結した。一週間ぐらいたつと命令が出た。下士官教育隊に転出。六カ月の教育を受け、終わると同日、第七三七部隊転属が決まり、独立守備隊本部付を命ぜられた。

数カ月過ぎ、ある朝未明、非常呼集で当番に起こされ営庭に出て見ると各中隊は出発準備完了していた。しまった、急いで本部に命令受領である。本部に駆け込んだ。部隊長に大目玉をくらった。いよいよソ連軍参戦、国境を突破し満州に入っ

たとのことだった。

中国人は街から、ソ満国境のソ連軍のいる方向に赤旗を立てて行くのが見えた。中国人は日本の軍隊が負けるのも前から知っていたようだ。我が方は突然戦闘が起ることなど夢にも思わなかった。不意を打たれ右往左往する有様だった。鳴崎少尉の命令で、各自早く陣地に行つて戦闘準備をせよとのこと。私は乗馬して突進し、皆の来るのを待っていた。陣地は一地区隊で、戦時の時は二地区の陣地中一番大きくて安全な陣地であった。それぞれの部隊が到着しても兵器がないから戦闘準備もできない始末だ。ましてや我々は特殊部隊であるから高射砲、野砲、みな南方戦線に送られ、残るはわずか一五センチ火砲が一門取り付けてあるだけ。これは一五度しか回転できない砲だった。また迫撃砲一、二門ぐらいじや戦いはできない。後は突撃の肉弾戦しかなかった。すると篠原准尉が指揮して九〇式野砲と三八式野砲各一門ずつ一、二地区に分散配備した。二地区の九〇式野砲は新

る見るうちに衰弱し、皆ふらふらだった。戰場整理が始まり、物資はすべてソ連への輸送が毎日の作業であった。

東山にある米の山積み及び馬糧等々、有りとは有らゆる物を荷車に積み込み作業が続いた。十月半ばまでかかる。ある日「ダモイダモイ」と言われて貨車に物と一緒に詰め込まれた。ウラジオ回りで帰るんだ等と皆適当なことを言っていたが、汽車はまた北へ北へと進む。身動きできぬほど詰め込まれ、一体どこへ連れて行かれるのだろうと思っていた。何日か走ると海が見えた。これが「ウラジオ」かと思つたらバイカル湖だ。皆失望した。

水を飲みたくても水がない。氷を割つて飲んだ。希望も何もかもなくなった。

幾日か過ぎ汽車が停車し下車の命令があり、ソ連の兵隊が自動小銃を肩から掛けて「ダワイダワイ」と言い、急がせた。寒い寒い、寒いと言うよりも痛いという方が良いかもしれない。着いた所

型の砲であった。一地区の三八式野砲は明治三十八年式で物の用には立たなかった。

軍部の指導者は兵隊の一人一人が弾丸と思つていたようだ。日露戦争の二〇三高地の戦いぐらいにしか思わなかったようだ。ハイラル戦闘も兵器のない戦いだ。ミグ戦闘機が飛来し、日本のミカド負けたとの宣伝ビラをまいて飛び去り、何回も何回も同じことを繰り返していた。

満鉄の駅の給水塔は敵の手中に入り、給水塔の上で我が方の陣地が一望に見えるのである。敵は的をつけて射つて来るので百発百中で終つた。武器のない戦いなんて勝てる訳がない。肉弾では戦争に勝てる訳がない。情けない、そんな思い。そのうちに一地区陣地が一斉に火の海と化し、我が軍も応戦したが全滅。歩兵部隊を指揮していた少佐も戦死とのこと。ハイラルの要塞もついにソ連軍の手に落ち、ハイラル戦も終わりソ連軍の武装解除が始まった。戦闘が終わり陣地を降りる。皆下痢である。水溜りの水を飲んだからだ。体は見

はエニセイ川岸だった。川は一面凍り、川幅は広く、向こう岸が見えないほどだった。夏は川に船が浮び、冬は凍つて道路となり、都合の良い国と思つた。見る物は自動車から着る物、食料品、みんな米国製品には驚いた。ソ連兵は教育が低く、まともに数を数えることが出来ない兵隊がいたようだ。共産主義の片寄つた教育だろう。

国の上層部だけ教育がなされていたようだ。一般民衆は働け働けと言う政治のようだったと思われた。

捕虜、食事は満州から持つて来た馬糧の豆粕であった。粗悪な食事。零下三〇度、四〇度の中、仕事ノルマが課されて、ノルマを完遂しないと食事が減らされた。そのうちに栄養失調者、また病人が続出し、朝起きると隣に寝ている戦友が冷たくなって死んでいった。こんな事は珍しくはない。将校連中は将校食で作業も免じられ、ぬくぬくしていた。兵隊は日々に弱り死んでいった。

そうしている間に民主運動というのが始まりア

クチーブが出てきて、共産主義の宣伝が始まった。ソ連の連中に吹き込まれ得意顔をしていた。日本に帰ってそんなものが通用するものかと思った。天皇制打倒とかスターリン元帥万歳なんて威張っていた。赤に染まったようなふりをしないと吊し上げられて、反動分子にされるので仕方なく天皇制打倒、スターリン大元帥万歳と檄を飛ばす。信念が入っていないとまた叩かれ、いやな奴等だと思ふ。

今度は自分の番が来て、栄養失調でマラリアにかかり、病院に運ばれ三カ月間ぐらいで退院。また百人ぐらい奥地へ送られ三年も過ぎていた。今度は鉄道の仕事だ。

一年ほど過ぎてダモイでナホトカに集結、ダモイラーゲルに入り、今度は作業もなく帰る船が入るまで民主教育だった。帰還船高砂丸に。満四年と八カ月、よく生きてこられた。船の中でつくづく生きた感じだった。シベリア抑留は生き地獄だった。誰に話そうとも、実際に抑留生活をした者

成十六（二〇〇四）年一月一日に他界した。私も腰痛治療のため、平成十六年八月から十二月まで四カ月入院、手術を受け、現在仕事は出来ないが、会社は子供達に任せ毎日の療養に専念している。豊かな、そして便利な世の中になったが、その蔭で幾十万、幾百万人の尊い命が失われたか。私達シベリア強制抑留者もその一人である。

私の略歴

大正十二年一月二十二日 静岡県富士郡富丘村大
中里一七八七番地に生まれ、兄弟十人の長男
昭和九年 富丘小学校高等科二年卒業
昭和十七年一月 兵隊志願、甲種合格
昭和十八年 関東軍第八国境守備隊入隊
同年六月 ハイラル病馬廠に勤務
昭和十八年十一月 ハイラル東山高射砲隊に編入、
同年十一月末 下士官教育隊
昭和十九年 第七三七部隊に転属、本部付となる
昭和二十年八月十五日 敗戦

でなければ理解できないだろう。それほどに非人間的な扱いであった。

いよいよ昭和二十四年八月十日、ソ連ナホトカさらば、同月十五日舞鶴に上陸。これでやっと日本を踏んだ。長かった抑留生活、徴用工から始まり、北満のハイラルの軍隊生活、そして敗戦、シベリアに送られた。十年間の歳月は流れ、暗黒な無意味な青春だった。

昭和二十四年十月、戦友の阿幸地の堀水と富士宮駅に降り立った。皆の出迎えを受け敬礼と一言、「同志スターリン元帥のお蔭でたどりま帰国致しました」と言った。出迎えの皆グラグラ笑い始めた。以後は要注意人物にされた。

その後、堀水君の兄にお世話になり、望月家の娘を世話され結婚、幸せな生活を送り実家を出た。一文商いから苦労して現在のサンストアー株式会社を経営。お蔭様でお客様の支持を受け、何とかやっています。子供は女ばかり三人で、孫が九人、皆で家業のスーパーを手伝っている。妻は平

同年十月にソ連軍により「シベリア」コムソモリスク抑留
昭和二十四年八月 ナホトカ港より高砂丸で帰国
昭和二十四年十一月 占領軍GHQより出頭命令、
同年十二月 解除さる
昭和二十五年より現在地にてスーパー橋本や経営
現在に至る

【執筆者の紹介】

生年月日 大正十二年一月二十二日
学歴 富丘村尋常高等小学校卒業（昭和九年）

職歴 名古屋兵器工場及び農業

家族構成 娘、記世子、容子、三人（現在）

軍歴 昭和十八年一月、福岡集合、名古屋八部隊野砲高射砲部入隊

昭和十八年二月満州ハイラル、第八国境守備隊（野砲隊）現地入隊

昭和二十年十一月、シベリア・コ

終戦抑留歴

昭和二十年十一月、シベリア・コ

復員年月
ムソモリスク雑作業
昭和二十四年八月十五日、舞鶴上

復員後の職歴
陸
商店 スーパー経営、現在に至る
(静岡県 熊谷 精一)

シベリア哀歌

奈良県 川端 真一郎

理不尽に襲ふやはげし北おろし

雪原を北へ北へと俘虜の貨車

容赦なくシベリア吹雪俘虜を打つ

吐く息の髭に氷柱となりいたり

地吹雪や前ゆく兵に確かと蹴き

呼び交はす声凍てつけり伐採林

凍てし樹の斧はね返すこだまかな

凍て土に戦友葬りし日の無口